事業の名称

# 学校と田畑をつなぐ地域サポート農学プロジェクト
# －あみ食育の新展開に向けて－

〔事業責任者〕

（自治体側）
阿見町農業振興課・課長　村松　利一

（大学側）
茨城大学農学部・教授　安江　　健

事業テーマ：**地域の教育力向上**

## 連携先

阿見町農業振興課，阿見町教育委員会，JA 茨城かすみ阿見営農経済センター

## プロジェクト参加者

安江　健（茨城大学農学部教授・プロジェクト代表：本プロジェクト全体の企画・調整・総括）

村松利一（阿見町農業振興課・課長：阿見町の行政部分の企画・調整・実施）

根本　正（阿見町教育委員会指導室・室長：学校農園を活用した食育事業の調整）

宮本英紀（JA茨城かすみ阿見営農経済センター・センター長：学校農園を活用した食育事業の企画・実施）

高田圭太（茨城大学農学部 FS センター・業務係長：FS センターを活用した親子での栽培・収穫・加工一貫体験の企画・実施）

大野莉沙（茨城大学農学部地域環境科学科 3 年・のらボーイ＆のらガール代表：学校農園での食育事業の補助）

宮口右二（茨城大学農学部准教授・研究推進委員会地域連携担当副委員長：小学校での食育授業への教員・学生の派遣調整）

## プロジェクトの実施概要

### ①プロジェクトの目的

農学部では阿見町農業振興課と連携して，地元小学校において平成 21 年から地場農産物を用いた学校給食による食育活動を展開しており，全国でもユニークな取り組みとして注目されている。本プロジェクトでは，いままでの取り組みをより発展させ，農学部内の教育研究資源（フィールドサイエンス教育研究センターを含む）を活用し，児童や教員および保護者へ「農」のもつ地域環境保全機能や「食」のもつ健康機能について科学的理解を深める取り組みへと発展させることを目的とする。

### ②連携の方法及び具体的な活動計画

具体的な活動として，従来から実施している 1）大学教員の小学校への派遣授業を充実し，2）地元 JA が主催する各学校農園へ教員や学生を派遣することによる食農教育の充実化，3）観光農業育成に向けた親子による栽培・収穫・加工一貫体験，に取り組む。加えてこれら 1）～ 3）に学生を積極的に参画させることで，学生の「地域での学び」を促進すると同時に，実施者（大学教職員や JA の職員等）と受益者（児童とその保護者等）間の敷居の低減化を図る。1）については従来から町農業振興課とともに実施してきた実績を踏襲・発展させるとともに，2）については従来，町教育委員会と地元 JA が実施してきた事業に本学農学部が参画することで実現する。3）については本学 FS センターが新たに企画・実施するが，町教育委員会を通して広く町民に広報いただく。

③期待される成果

これら1）～3）の実施により，農学部のもつ農学教育・研究機能を地域の教育力向上に直接資することができ，阿見町という地域コミュニティにおける茨城大学の特徴的な役割が発揮できる。加えて小学校児童を含めた地域住民との交流を通して，本学農学部の学生に「地域」に目を向けることの重要性とそこから学ぶ楽しさを教育できる機会も提供することができる。

## プロジェクトの実施成果

①活動実績

上記1）～3）それぞれの今年度の活動実績は以下の通りである。

**1）阿見町小学校における食育授業への講師と学生の派遣**

平成21年度から阿見町農業振興課とともに実施してきた事業の継続であり，本年度からは今までの実績が評価され，茨城県立医療大学からも講師を派遣いただけることとなった。農学部教員による「食材の生産・加工・流通過程」の説明に加え，医療大教員による「食材の健康機能」の話題を追加し，内容を充実させて計6回実施した。

具体的には表1の日程および内容で，延べ6名の教員を講師として実施した。参加学生としては，全体で延べ10名の教職志望学生（農業職）がオブザーバーとして参加した。個々の回の実施内容については農学部のHPにすべて掲載しているので，詳細はそちらを参照いただきたい。

表1　小学校での食育授業実績

| 日付 | 題材 | 対象 | 講師名 |
|---|---|---|---|
| 6/27 | スイカ | 阿見第二小5年 | 東尾久雄 |
| 7/4 | メロン | 吉原小4～6年 | 東尾久雄 |
| 10/10 | お米 | 阿見小3年 | 新田洋司 |
| 11/14 | レンコン | 舟島小5年 | 牧山正男 |
| 12/19 | ヤーコン | 本郷小5年 | 宮口右二 |
| 1/16 | 牛乳 | 実穀小5年 | 安江　健 |

図1　実際の授業の様子（牛乳の日）

図2　スイカの切り分け体験

**2）阿見町小学校における学校農園を活用した食農教育への学生の参画**

小学校の学校農園を活用した食農教育については，平成22年度よりJA茨城かすみ農協が阿見町の要請を受けて事業化しており，平成23，24年度には町内8校全ての小学校において学校農園での作物栽培指導と栽培補助を実施してきた。しかし補助事業年度の終了に伴い，JA茨城かすみ農協の単独では8校全てでの実施は困難となり，町も事業として予算を捻出することができず，規模の縮小が余儀なくされていた。そこで本プロジェクトにより，JA茨城かすみ農協の学校農園を活用した食農教育事業に茨城大学の教員と学生が参画することで，阿見町の全8校の小学校全てでの食農教育を実施できた。

各小学校での本年度の栽培作物は，従来通り各

学校の要望に応えて表２に示す通りであり，主に本事業ではこれら学校農園の栽培管理補助に学生を派遣した。

表２　各小学校での栽培作物

| 小学校名 | 栽培作物 | 対象学年 |
|---|---|---|
| 阿見 | 落花生 | ４年生 |
| | ジャガイモ | ６年生 |
| 阿見第一 | 落花生 | ４年生 |
| | ジャガイモ | ６年生 |
| 阿見第二 | 落花生・ゴーヤー | ４年生 |
| | ジャガイモ | ６年生 |
| | サツマイモ | 全学年 |
| 本郷 | サツマイモ | ２年生 |
| | ジャガイモ | ６年生 |
| | インゲン豆 | ５年生 |
| 吉原 | 落花生・ゴーヤー | ４年生 |
| | ジャガイモ | ６年生 |
| | ヤーコン | ３年生 |
| | サツマイモ | 全学年 |
| 実穀 | ゴーヤー | ４年生 |
| | 落花生・ヤーコン | 全学年 |
| 舟島 | 落花生・ゴーヤー | |
| | ヤーコン | ４年生 |
| | トウモロコシ | ２年生 |
| 君原 | 落花生・ヤーコン | |
| | サツマイモ | １・２年生 |
| | ジャガイモ | ６年生 |
| | ゴーヤー | ４年生 |

これら学校農園への栽培管理補助を学生に呼びかけたところ，農学部３年生の20名が名乗りを上げてくれ，本学の学生地域参画プロジェクトである「のらボーイ＆のらガールの食農教育プロジェクト」の一環として積極的に参加してくれた。上記の各校に毎週３～４名が主に除草などの栽培管理に赴き，６～12月の期間を通して延べ285名の学生が学校農園の栽培管理を補助した。

自身の講義の合間を縫っての炎天下での除草作業（図3）はさぞ大変であったろうが，自分たちが育てた作物を収穫する喜びに加え，児童や先生といった地域の人々とともに収穫を体験できる喜び（図4）は，参加した学生全員に何にも代えがたい貴重な経験となったようである。また事業主体であるJA茨城かすみ農協はもちろんのこと，訪問先の小学校においてもHPなどで「今日も暑い中，茨大のお兄さんお姉さんが草取りに来てくれ，子供達も放課後はいっしょに草取りをしました！」などのコメントが寄せられた。やはり若い大学生が頻繁に通うことで，児童や先生達とのコミュニケーションは大幅に改善した。

図３　炎天下で黙々と除草作業する学生達

図４　お兄さんお姉さんと一緒に収穫体験

一方，この食農教育事業はこれら一連の栽培管理と収穫・試食までを学校教育の中に位置付けることを最終目標にしているが，これら総合学習などの授業自体や，児童に書いてもらった作文や絵画の展示・表彰式自体には，大学の講義との関係でほとんどの学生が参加することができなかった。参加学生に対する教育効果をより高めるためには，各小学校とJAおよび大学間での日程調整

が課題であることも明確となった。

### 3）茨城大学農学部 FS センターでの親子による栽培・収穫・加工一貫体験

この事業は本年度より新たに着手した事業であり，受け入れ態勢が整った秋季に以下の 3 回実施した（表 3）。残念ながら一貫体験の「栽培」部分を体験させることはできず，収穫・加工・試食までの一貫体験となった。

表 3　FS センターでの一貫体験

| 日付 | 内容 | 参加者数（親＋子） |
|---|---|---|
| 10/14 | 栗の収穫・試食 | 18（7 ＋ 11） |
| 11/24 | 小麦からのパン作り | 13（5 ＋ 8） |
| 12/25 | 小麦からのパン作り | 16（7 ＋ 9） |

10 月に実施した栗の収穫・試食体験では，まず講義室で職員より害虫や保存方法の説明を聞いた後，実際に果樹園で栗の収穫作業を体験した（図 5）。その後，自分たちで収穫した栗を焼き栗にして試食した。11・12 月に実施した小麦からのパン作りでは，講義室で日本の小麦自給率や栽培方法など，写真を用いて説明を受けた後，センターで収穫された小麦を自分たちで製粉し（図 6），食品加工室で全粒粉パンを作成・試食した（図 7）。

図 5　親子での栗収穫体験

図 6　粉になった小麦に興味津々

図 7　焼き上がりが待ち遠しい・・・

いずれの回も参加者の評価は高く，毎回実施したアンケートでも，「他ではできない体験ができた」，「キウイフルーツやブルーベリー，トマトなど，他の作物の体験も企画してほしい」との感想が多く寄せられた。また，10 月の栗収穫体験に参加した 7 組の親子のうち 5 組が後のパン作りにも参加しており，リピーターが多いことからも，本体験事業が好評であったことが伺えた。本年度は受け入れ態勢の整備に手間取り，当初の予定であった「栽培から収穫・加工まで」を一貫体験することはできなかったものの，FS センターの作物を活用した収穫体験は，潜在的なニーズが高い（すなわち教育効果が高い）ことが示された。

### ②プロジェクトの達成状況

1）の食育授業に関しては，従来からの継続で

あることに加え，本年度からは県立医療大の教員が参画してくれたために，回数および内容的に当初計画を上回って実施できた。特に「お米の日」には関東農政局土浦地域センターの協力で，もみすりと精米体験ができた。従来の食育授業では学校側の制約でスイカとメロンの切り分け位しかできていなかったので，この点では従来よりも教育効果は高まったと評価できる。また本年度からは教職志望学生が本学の「教職実践演習」で使用する「学びのあしあと」に記載して自らの教育体験の振り返りに活用できた点で，本学の学生にも教育効果を付与できた。

2）の学校農園補助事業については，8校全てでの食農教育が達成できたことに加え，参加した学生の「地域」に対する興味や課題意識が醸成できたこと，および「子供たちに農作業を指導する責任と喜び」という何にも代えがたい体験を本学の学生に付与することができたという点で，当初の計画を十分に達成できたと考える。また，本年度の実績を踏まえ，次年度からは阿見町が独自に予算化してこの事業を主導することが決定し，大学による物資的な協力は次年度からは不要になると思われる。この点でも本年度のこの事業の意義は大きかったと評価できる。

当初計画では本年度から新たに立ち上げた3）の事業の進捗が最も心配された。準備の遅れから「栽培」体験はできなかったものの，収穫・加工・試食の一貫体験を3回実施することができ，評価も極めて高かったことから，準備期間としての立ち上げは十分達成できたと評価できる。次年度以降に本格的な実施を目指したい。

**③今後の計画と課題**

1）については本年度に当初計画を大きく上回ることができたため，次年度以降も同内容，同規模の開催を継続する。加えて，参加する教職志望学生の数を増やす試みとして，参加案内をする対象を2，3年生にも拡大したい。もっと回数を増やす（つまり食材を増やす）努力も必要と考えるが，この食育授業は学校給食と連動した食育に意味があるので，町の給食費との兼ね合いが必要となろう。

2）については，次年度以降は物資的な援助は不要となるものの，学生の参画自体は教育上極めて有効であることから，本年度と同程度は参画させる形で実施する。加えて上記の様に，小学校とJAおよび大学間での日程調整を密にし，実際の授業や展示会といった成果発表の場に，補助した学生が立ち会えるように働きかける。

3）については，とにかく次年度以降は「栽培」から体験できるよう，作物の作付け期から定期的に参加できる体制を構築して実施したい。体験作物の多様化に対する要望は非常に高いことから，この体制が構築できれば，参加者数は十分見込めると期待できる。「参加人数の点で，リピーターはご遠慮ください」にまでなれば，参加者募集のための広報に時間をかけることなく，恒常的な開催が見込めるものと考えられる。また，本年度はこの事業に関しては準備期間であったことから，学生は参加していない（積極的にはアナウンスしなかった）。次年度以降，恒常的な実施体制が整えば，積極的に本学学生にも立ち会って補助してもらうことで，本学学生への教育効果も期待したい。